

特異事項とデータ解析

山下亜紀子¹、山本勇次²、北村右一³

1 はじめに

当研究室では、統計処理の卒業研究で扱うデータとして、山本がネパールにおいて調査収集したものを利用している。これはネパールの都市ボカラにおける全数調査で、約9千世帯、5万人にも及ぶ大型のデータである。

収集したデータをコンピュータで利用可能にする段階から、山本の研究に関わってきたが、原データはネパールの大学生約100人を動員して聞き取り調査したものである。それを、日本の学生がOCR（光学読取り装置）用紙に転写し、大型計算機で読み取ってフロッピーディスクに保存した。これは固定長のテキスト形式データで、かなり巨大である。データ形式を変換することによってデータサイズを半分以下に縮小したが、それでも約3メガバイトと、パーソナルコンピュータで扱うには少々辛い大きさであった。

卒業研究は、学生達が山本の希望を受け、その年度の分析の重点項目を決めることから始まる。そしてしばらくは、データベースや表計算・グラフ作成などのソフトウェアに習熟する期間が必要である。これらに十分慣れたところで分析を開始するが、いきなり実データを扱うわけにはいかない。なぜなら、データが大きいため、その処理に非常に時間がかかることがあるからである。そこで、小型のテストデータを準備して、分析のシミュレーションを行う。

この方法は二つの利点を生み出す。一つは、プログラムやマクロなどを徹底的にチェックできることである。以前、この検査が十分でなかったために、数日かけた実データの分析をやり直さなくてはならなくなったことがあった。

もう一つの利点は、時間に依存する作業を並列に進行させられることである。実際の分析では、データベースソフトを用いて必要な情報を抽出し、その結果を受けて表計算・グラフ作成ソフトにより加工分析することになる。作業効率の面から、通常この二つの作業には別々の学生を割り当てる。データベース担当者の作業終了を待っていては、表計算担当者の作業時間が圧迫されてしまう。そこで、両者の間で受け渡すデータの形式を取り決めることによって、それぞれテストデータによる分析のシミュレーションを、同時に開始できるのである。

このような過程を経て得られた実データの結果については、学生達だけでも分析可能なこともあるが、ネパールの社会背景に根差した解釈が必要であるから、山本との協議を欠かすことはできない。そして、彼からのフィードバックに応じてデータ処理のやり直しや、表・グラフの様式変更などを行

¹長崎大学教育学部数学専攻・4年

²大阪国際大学経済学部・教授

³長崎大学教育学部数学・助教授

う。

現在の勤務地が大阪になってしまった山本と学生達との連絡には、手紙や電話のみならず、ファックスや電子メールも利用している。それでも微妙な事柄に関しては円滑な意志の疎通が難しいこともあり、研究の最終段階では学生達を大阪に派遣し、時には筆者も同行して最後の詰めを行っている。

本年度の研究の重点課題は、個人の特記事項の分析に決まった。この事項の詳細は第2節に譲るが、特記事項を分析対象に選んだことは、二つの問題をはらんでいた。

第一の問題点は、データの基礎チェックである。調査対象者すべてに関わる情報ではないため、これまで分析が見送られてきた。したがって、データの正当性の検査から作業を始めなければならなかった。しかし、この作業はかなり困難なものとなってしまった。記載事項が、予想を越えてはるかに多様だったせいである。松熊・山下両君は熱心にこの作業を進めてくれたが、本来ならば十分な人員を確保し、データ分析の前処理として済ませておくべきものであったのだろう。このまま続けると、肝心の分析処理に取り掛かれぬ危険を感じた。そこで基礎チェック作業を中断し、その時点で使用可能な項目を分析するという方向に、研究計画を転換せざるをえなかった。

問題点の二番目は、事項内容の特異性のゆえ、分析対象となるデータの絶対数が少ないことである。これが意味する危険性に気づかずに結果を解釈すると、誤った結論へと導かれる恐れがある。絶対数の1が内包する重み（データとしての価値）に留意し、得られた結果がデータのチェックミスや事象の偶発性に起因するか否かを判断する材料が必要なのである。学生達と筆者の間でこのことが議論されたのは、研究も終わりに近づいた頃であった。筆者の指導の甘さに原因があるが、山本に繰り返し解釈を強いるという負担をかけることになってしまった。

本稿の残りの部分では、第2節で山下がデータ処理の内容について述べ、第3節で山本がその解釈を試みる。

(北村右一)

2 データ処理の過程

これまでの過去7年間に渡る卒業研究によって、ネパール・ポカラ市の世帯に関する情報（約9千世帯）と個人に関する情報（約5万人）が整理され、データベースに入力されてきた。世帯に関するものには、世帯主やその住所、また、家屋の所有者の情報が、また、個人に関するものには、「性別」、「カースト」、「世帯主との続柄」、「年齢」、「職業」、「宗教」、「教育程度」、「特記事項」などの情報が含まれている。今回の卒業研究では、この個人に関するものの中から「特記事項」と他の情報との関係について分析することにした。「特記事項」とは、身体的特徴や病気などのことで、以下のように9つに分類され、それぞれが番号付けされている。なお、この番号を特記番号という。

1. 形質的特徴 … TWIN（双子）、6 FINGERS（多指症）など
2. 社会的特徴 … ICM（カースト通婚）、JUMMA（宗教的未婚娘）など
3. 出稼ぎ先地名 … BOMBAY、KATHMANDUなど
4. 出稼ぎ経験 … 30 YEARS IN BOMBAY など

5. ポカラ内転居時 … since 1980 など
6. 特殊教育歴 … ENGINEERING (工学) など
7. 家族関係 … ADOPTED (養子) など
8. 職業 … 職業名など
9. その他

これまでの研究によって「特記事項」以外のデータについてはある程度の分析がなされてきた。ところが、「特記事項」に関しては、まったく手がつけられておらず、OCR 装置（光学読み取り装置）で読み取られたままの状態であったため、例えば読み取りの際に、英字の O（オー）が数字の 0（ゼロ）と誤認されたままになっているというようなデータエラーのチェックもなされていなかった。これを分析処理するには、以下の作業が必要である。

- (1) 特記番号別にすべての表現を抜き出したリストを作成する。
- (2) OCR 装置の読み取りエラーや、英語のつづりミスなどを修正する。
- (3) 聞き取り調査をしたネパール人学生のローマ字化の不統一や、同一内容を別の言葉で表現しているものなどがあるため、リストを内容毎に分類し、同じ内容には単一の表現を割り当て直す。

本研究を開始するにあたり、山本も含めて研究方針を打合せた。そこでは、このデータの整理・統合を行なった上で、カースト毎の特記番号の分布を解析しようという目標がたてられた。まず、5 万件のデータから特記事項を含むもの（8,237件）を抜き出し、(1) のリストを作成した。

次に、(2) の作業であるが、日本人である松熊・山下の二人にとっては、辞書との格闘の日々であった。ただ、出稼ぎ先などに現れる地名に関しては、二人だけではどうにもならず、山本に不明点のリストを郵送し解決してもらった。こうして、特記事項として現れるすべての表現をアルファベット順に並べた、特記番号毎の辞書を作成することができた。

データ分析の前処理の最後の作業が (3) である。つづりについては、特記番号 2 の「ジュマ」（宗教的未婚娘）を例にとると、JUMMA 以外にも、JUMA や JHUMMA などの表現が見られた。このように、同じ内容であると確認できたいくつかの表現については統合することができたが、意味を持たないものもある。

そこで、我々二人は、表記や表現の違いに左右されず、データとして利用可能なもの、また、ネパールのカースト社会と深い関係のあるデータに着目しようと考えた。そして、データに誤りの見られない「カースト通婚」（ICM：異なるカースト同士の結婚）、データの統合が終了している「ジュマ」（JUMMA：宗教上の理由で結婚しない女性）の二つについて分析することを提案した。（「カースト通婚」、「ジュマ」については第 3 節参照）また、山本の方からは、「出稼ぎ先地名」についての強い要望があった。ところが、地名については本研究期間内でのデータの整理・統合が不可能であったため、今回は、出稼ぎに関する特記番号 3、4 を集計したデータを「出稼ぎ状況」として分析することにした。

この「カースト通婚」、「ジュマ」、「出稼ぎ状況」の 3 種類についての分析は、カースト内における

対象者の比率で比較を行った。初めは、各カーストの全数を母集団と設定していた。しかし、本研究の最終段階として大阪まで出掛けた際に、山本と3人で相談した結果、「ジュマ」、「出稼ぎ」がともに成人を対象とする事項であることから、「出稼ぎ」では母集団を全数から成人（15歳以上）の全数とし、「ジュマ」では、対象が女性に限定されるため、成人女性の全数として分析することにした。さらに、「出稼ぎ」に関しては、男性に片寄っているが、このような男性と女性の出稼ぎ状況の比較を行うために男女に分けて分析することにした。しかし、「カースト通婚」に関しては、同じく、成人を対象とする事項ではあるが、山本が過去（1981年）に調査したデータとの比較を行うために、これに合わせて母集団を全数としたままで分析を行うこととした。そして、これらをもとに、表及びグラフを作成し、分析を行った。

今回作成した表とグラフは以下の通りである。

<表>

- (1) カースト毎の出稼ぎの割合（男女別）……………（表1、表2）
- (2) カースト毎のジュマの割合……………（表3）
- (3) カースト毎のカースト通婚の割合
- (4) 男女のカーストの組み合わせ表（カースト通婚）……………（表4、表5）

<グラフ>

- (1) カースト毎の出稼ぎの割合（男女別）……………（グラフ1、グラフ2）
- (2) カースト毎のジュマの割合……………（グラフ3）
- (3) カースト毎のカースト通婚の割合

以上の表やグラフから、分析を行った。例えばグラフ2、3では、男性では出稼ぎ割合がカーストの影響を強く受けているが、女性ではそのような現象が見られないということがわかる。出稼ぎの性別構成比が男性に片寄っていることも合わせて考えると、これは、女性の出稼ぎ職種というものが限定されており、また、所属しているカーストには左右されないと予想される。このような詳しい分析については、今後の山本の分析を待たねばならない。

最後に、分析結果の信頼性を測るために、データ数を1だけ増減したグラフを作成した。このグラフは、1増加したものと減少したものとを横に並べた棒グラフである。本研究のように母集団の大きさに非常に差のあるデータの割合を比較する際には、1の持つ重みを考慮に入れる必要がある。グラフ3では、シェルパ（SHE）のジュマ率は他のカーストと比較した際、非常に高いように見えるが、このように1増減したグラフを検討すると、この事実が偶発的であった可能性が高いと言えるであろう。

（山下 亜紀子）

3. 資料の分析結果と課題

3. 1 ジュマの起源と文化伝播

<ネワール起源説>

ポカラでは、結婚適齢期を過ぎても未婚を続ける女性を「ジュマ (jumma)」と呼んでいる。第一図の「カースト毎のJUMMAの割合」は、カースト毎に「ジュマ」であると呼ばれている女性の総数が結婚適齢期(15才)以上の成人女性総数に対する比率である。この調査結果で、実数が一桁未満であるものに関しては、データとしての信憑性に関して若干疑わしいところもあるので、その実数から計算された「割合」に即して直ちに一般的な論述をすることだけは避けなければならぬ。従って、割合は大きいですが、シェルパ (SHE) が実数1であること、ボテ (BHO)、タカリ (THA)、ギリ (GIR)、タマン (TAM)、ガルティ (GHA)、マガル (MAG) に関しては、その割合の高低に関して深読みした解釈を避けるほうが無難であろう。

そこで、人口的にポカラの4大カーストであるバフン (BRA)、チュットリ (CHH)、ネワール (NEW)、グルン (GUR) について見てみると、何れも2桁以上のジュマの実数を示している。しかもネワールが実数65で2.5%以上の割合の大きさであるのに比べると、それ以外のチュットリ、バフン、グルンの割合が1.0%以下であることが注目される。つまり、この図から「ネワールにおいては他の主要カーストに比べてジュマの発生率が2倍以上に高い」という事実だけは読みとることが出来ると言っておかまわないであろう。

私は、1978年のポカラでの調査時にネワール族の女性(中年の既婚者)が巫女となり、ベルの神を招き呼んで泥棒を探しだそうとする「黒手鏡の呪儀」を観察したことがあった。その時の神霊の媒体は月経が始まっていない少女または夢精が始まっていない少年のみであった。この黒手鏡の呪儀では、神霊媒体となる子供の右の手ひらに「ギー」(牛乳から作り出したバターの元となる溶液)に炭を混ぜた物を塗って黒い反射面を作り、巫女がベルの神霊を呪術で招く。神霊が霊媒の子供に作用すると、自分の黒手鏡(反射面)を注視していた少年・少女がそこに泥棒が侵入し悪事が行われた場面の映像が再現されるという呪術儀礼であった。(残念ながら、私の体験した場面では犯人を特定する程の明瞭な画像が被験者の黒手鏡には現れなかったが、犯人らしい2、3人のグループの存在は少女により、解読されたのであった。)この呪儀で注目されるのは、ベルの神霊が「第二次性徴」(月経・夢精)の訪れていない「無垢(性欲を知らない)」の子供達を好んで訪れるという特徴である。ロリータ・コンプレックスのネパール版の起源のような話となるが、ベルの神様が無垢の子供に対して霊的に親和性があることを覚えていて欲しい。

ネワール族は元来カトマンドゥ盆地に定住していた民族であり、現王朝の祖先によって18世紀中葉に軍事的に征服された際に全国に逃げ散らばるようになった。現在ポカラに定住するネワール達もカトマンドゥから流れてきた者の子孫である。そのカトマンドゥ盆地では現在もネワール族の人々の間で「生き神」としてのクマリ信仰がある。このクマリとして選定される子供も月経が始まる前の幼女で、彼女が月経が始まる年齢に達するとクマリの座から外されてしまう。その後は生涯年金に恵まれるが、何故かクマリを務めた女性は縁遠いとも言われている。この「クマリ」の生き神と「ベル」の霊とがどのような関係にあるのかは、今後もっと詳しく調べなければならないが、性的に無垢な特徴

が共通している点が注目されよう。

一説では、ジュマの起源として、ネワール族の間で伝統的に「ベル」と呼ぶ神との象徴婚の伝統がある。幼女期にベルとの象徴婚をすませたネワール女性は結婚適齢期になっても未婚生活を続けるものが多い。そして、上記のグラフは、このジュマのネワール起源説を支持しているように思われる。何故なら、それ故にネワール女性の間でジュマの発生率が最も高いからである。それに続くチェットリ、グルン、バフン等の間でのジュマの存在は、ネワール族に由来するジュマの慣習が文化的に伝播していったものと考えられるからである。

ここで注意したいのは、男尊女卑的な社会では、結婚とは成人女性を閉鎖的な性規範で呪縛する社会制度である。しかし、結婚していなければ、その閉鎖性から解放される理屈は立つ。伝統的に正式な結婚をした女性が夫に対する性的貞淑さを強く求められる社会では、結婚した女性の不倫は厳しく戒められる。(しかしながら、その様な社会でも男性の複婚は承認されているので、男女同権社会から見ると実に不本意ながら、結婚した男性の不倫には道徳的責務が殆ど認められない。)しかしながら、ネワール族の間では、ジュマである女性は、現実には夫を持っていないだけに、その性的自由を社会的に黙認される傾向があったと言われている。大胆な言い方をすれば、ジュマとはそのような不理尽な男性中心主義の結婚制度に対する女性からの反抗の制度でなかったかと思われる。もっと深めると売春の保護神としてのベル神という関係があるのかもしれない。このような視点から、「ネワール族におけるジュマの起源と社会的機能」に関するより深い研究は今後の興味あるポカラでの研究課題として設定されよう。

<マトワリ起源説>

ジュマの起源に関するもう一つの仮説は、チベット仏教の伝統が残るマトワリ諸族が食ひ扶持減らしの為に、女性を尼僧院に送り出す習慣からジュマの制度が出来てきたとする説である。ポテ、シェルパ、グルン、マガール、タカリ等はチベット・ビルマ系言語を持っているモンゴロイド系人種である。彼等は本来ヒマラヤ山系の3000メートル以上の高地に住んでいた(低地に移住しだしたのはマラリヤが撲滅された1960年代以降である)。彼等の住んでいた高地は特に冬の寒さが厳しいので、彼等は酒を飲み体内から暖をとる習慣があった。それに対して、平地インド出身(温暖地)の高位カースト諸族(バフンやチェットリ)達は、ヒンドゥー教徒であり酒を不浄なものとして不飲酒の伝統を持っていた。近代ネパールは、これらバフン・チェットリが自分達のカーストの原理の中に、モンゴロイド系山地諸民族を国家形成の枠組みの中に入れてしまうことで成立したのである。そして、バフン・チェットリ達は、モンゴロイド系山地諸民族をその飲酒慣習の特徴から「マトワリ(飲酒カースト)」と呼ぶようになったのである。

マトワリ諸族はいずれも熱心なチベット仏教の信奉者であったし、今でもそうである人々もいる。(五体投地による聖地巡礼を見よ!)彼等の住むヒマラヤ高地は農業生産に乏しい。短い夏の間にならずかな耕作地で小麦、ソバを生産し、ヤクやヤギを飼育するしか食料生産の手段はないから、決して経済的に豊かになることはない。この土地生産性の乏しさと厳寒の長い冬との生活環境が彼等の熱烈な仏教への信仰と結びついているのであろう。その仏教では仏法を絶やさなため男は僧院に、また

女は尼僧院で生活し、生涯結婚もせずに来世の解脱を祈る生活習慣があった。この仏教僧院の社会的機能を生産能力の低い、かつ人口総数の小さいマトワリ諸族の社会の中で把握すると、(1) 貧乏な家族が余剰人口の食い扶持を減らす為に幼少から子供を僧院・尼僧院に託すこと、(2) 僧院・尼僧院に生活するものは結婚しないから、在家の信者と違って人口再生産能力を放棄せしめていることになる。つまり、仏教僧院は、富の社会的に平等な再配分を実行する機能とともに、社会の自然人口増加を抑制する社会的機能をも保有していたものと考えられる。そして、僧院や尼僧院に一旦在籍したものの家族の都合で再度俗界に戻ってくるものもあった。「ジュマ」とは、このような尼僧院から環俗した後も結婚しない成人女性のことを呼ぶという説がある。ジュマのネワール起源説とは異なるマトワリ起源説である。

そこで我々のデータをもう一度見てみると、実数1であるシェルパ、タマン、実数2であるボテはデータの信憑性が少ないとして除くと、タカリのジュマ率が2.13%、グルンは0.54%であることが注目される。つまり、ネワールのジュマ率が2.66%に比べると、タカリのそれは半分以下だし、グルンのそれはチェットリのジュマ率0.92%よりも更に落ちることにある。これらの事実から判断すれば、ジュマのマトワリ起源説はありえない。ジュマはネワール族から始まり、それがポカラに在住するマトワリ諸族やチェットリ・バフンにも伝搬したのだと考えるのが、より妥当であろう。ネワール族の創作したジュマの名称を、マトワリ諸族が尼僧院から環俗後も結婚しない女性を総称する為にその用語を借用したと解釈する方がより自然であろう。

3. 2 カースト毎のポカラ外の出稼ぎ

ネパールのポカラは中西部ネパールの政治、行政、文化の中心地であるとともに、国際的な観光地としても有名である。今も外国からの観光客の流入で近年都市化が進んでいる。基本的に自給自足農業で生活していたポカラの人々は、近年の都市化・貨幣市場化の変化に対応していろいろの生活物資が市場に並べられるようになったことによる生活水準の上昇を楽しんでいるようでもあるが、彼等の懐具合の内実は現金不足で困っている。従って、現金収入の確保をする為に職探しが大変である。公務員となるには学歴等の資格と特別のコネが必要だし、その採用人数も多くない。それで観光産業の発展による雇用の増大に期待するところは大きいが、残念ながらポカラの場合には観光産業の発展がストレートに雇用増大に結びつかない。

その最大の原因は、毎年6ヶ月の間の雨季である。温かい陽光とヒマラヤのパノラマが売り物のポカラは乾季の間は観光客にとり天国のような所であるが、ヒマラヤが隠されてしまう雨季には陰気で不活発な地獄と化してしまう。テニス場もゲームコーナーも何もないホテルでは、3日も滞在すると退屈で死にそうになる。従って、雨季の間は観光客は殆ど訪れることはない。この季節的変動の故に大手の観光産業資本はポカラに観光地としての大型のインフラストラクチャーを投資する決断を渋っている。ポカラにある観光客用の宿泊施設の大半は「ロッジ」と呼ばれる民宿もどきのもので、しかもその殆どが家族内労働により経営されている。乾季の多忙時のみ家族外の季節労働者を臨時雇用することで間に合わせているのである。従って、観光産業の発展はポカラ市民にとり安定した職場の提供源とはなりえない。だから、ポカラの人々は、現金収入を求めてポカラ外、その多くは国外に出稼

ぎに行かねばならないのである。

本資料では、各カースト毎の15才以上の労働可能人口総数に対する出稼ぎ者総数の割合を「カースト毎の出稼ぎの割合」と呼んでいる。この図からは、他のカーストに比べてグルンの出稼ぎ率が顕著に高いことが明瞭である。その実態の詳細を男女別に「表1」、「表2」から見てみると、男子の出稼ぎ率は、グルン(21.19%)が突出しており、次にチェットリ(14.11%)、ギリ(13.62%)、タカリ(10.85%)、マガール(9.99%)、ネワール(8.55%)、バフン(9.74%)となだらかに下降している。グルン男子が他のカーストに比べて出稼ぎ率で突出している理由は、「グルカ兵」として英国、インド、ブルネイ、香港等に出掛ける伝統があるからである。もちろんグルン以外のほかのカーストにもグルカ兵となることがあるが、その主力は何と言ってもグルンであった。

女性の出稼ぎ率を見ると、最高のタカリで4.26%と男の五分之一に落ちてしまう。次にチェットリの場合でも、男の出稼ぎ率の約五分之一に近い3.75%となっている。その次にタカリ、ギリ、ネワール等は男子の場合の二分之一近くになっている。従って、出稼ぎは男において顕著であるが、女でも幾分かは出稼ぎする傾向があると一般的に言えるであろう。問題は、現在のデータからは女の出稼ぎ率が出稼ぎに行った男の伴侶として付いていった場合と、女一人で出稼ぎに行った場合との区別が出来ないことである。私自身は前者のケースが一般的であろうと考えるが、それを支持するデータは今のところ無く、今後の調査課題として残されている。

ポカラにおいては、インド人の出稼ぎ者がたくさん観察される。彼等の場合、殆どが男性である。兄弟単位や親戚・友人単位でポカラに間借りをして、露天商や行商に出歩き、家族に送金する金を貯めるのである。この事実を、インドで出稼ぎしている多くのネパール人と比較すると、相互に旅行ビザ・就業ビザが不要なインド・ネパール国境のオープン・ボーダーの面白さが見えてくるだろう。もし、近い将来日本と中国とがオープン・ボーダーとなることがあれば、どういうことになるだろうか？一度想像していただきたい。長崎県はまず真っ先に職を求める中国人出稼ぎ者によって占拠されてしまうであろう。

今後の研究課題としては、出稼ぎをもっと精緻に調査して、(1)ポカラ以外のネパール国内の場合と、国外の場合、(2)出稼ぎ者の動機理由、とくにプッシュ要因とプル要因の区別によってどのように出稼ぎの実態が変わってくるのか等の経済階層との相関を求めて研究することが必要であろう。

3.3 カースト通婚

カースト社会には同じカースト内の男女が結婚する「カースト内婚」の規範的原則がある。その原則から逸脱してカーストの異なる男女が行う結婚を「カースト外婚」または「カースト通婚(インターカースト・マリッジ)」と呼ぶ。伝統的なヒンドゥー方式の結婚観は、1)カースト内婚、2)見合い結婚、3)婚資金(ダウリー)、4)ヒンドゥー教司祭による宗教的婚礼儀式、5)親族を招待した大婚礼宴会のいずれもが必須の構成要素となっていた。しかし、西洋化、都市化、貨幣市場化の流れの中で、カースト社会そのものが瓦解し始めると、伝統的なヒンドゥー方式の結婚観も崩れだしてくる。この「伝統的なヒンドゥー方式の結婚」の5つの構成要素毎に比較すると、「近代的なヒンドゥー方式」による結婚は、1)カースト通婚、2)恋愛結婚、3)ダウリーの廃止、4)ヒンドゥー寺院前で司

祭抜き本人同士の簡略婚姻儀礼、5) 友人仲間うちの小規模のパーティという方向へと変化している。このヒンドゥー教徒の間の伝統的結婚方式から近代的結婚方式への変化は、昨今のネパールが近代化、西欧化、都市化の流れの中で伝統的カースト社会がより個人主義化、世俗化、合理化する方向への社会的変化を考察する適切な指標となりうるのである。そのような問題意識から、私は1981年にポカラ全市においてカースト通婚の調査を実施した。その時には329組のカースト通婚夫婦を見つけだしたのである (Yamamoto 1983)。

今回の資料は、その1981年に続いて、私が1983年に実施したポカラ全戸調査の結果から得られたカースト通婚のデータに基づいている。カースト通婚の問題に関しては、1981年の調査と1983年の調査とは調査方法が極めて異なっている。前回では、調査目標をカースト通婚のみに限定し、ポカラ全市に密かに生活しているカースト通婚カップルを探し歩いたのであった。しかし、今回の調査は、ポカラ市全戸の家族構成調査であり、その結果としてカースト通婚者が発見されたとしても、それはあくまで副次的な結果でしかない。事実、1981年の調査では329組のカースト通婚夫婦が発見されているのに、その2年後に行われた1983年の調査では297組のカースト通婚夫婦しか発見されていない。これら両調査間でポカラのカースト通婚夫婦の実数が32組の相違があるという事実をどのように解釈できるであろうか？

そこでまず二つの調査の方法論的相違が調査結果に影響していないと仮定すると、その両調査間の2年間の年月の間にカースト通婚夫婦の実数が32組（これは1981年次の9.2%に相当）が減少したと考えることも可能である。確かに、ポカラの人口の流入と流出は烈しい。しかし、第一に、私の調査経験ではポカラにおける平均的な年間の人口増加率はだいたい5%くらいである。第二に、その間にも都市化、貨幣市場化の流れは決して逡巡することなくますます加速されていると考えられるので、常識的にはこの2年間にカースト通婚夫婦の総数が増加することは考えられても、資料が示すように9.2%も減少していることは考えられない。従って、上記の仮定そのものが間違っているものと推測されるのである。つまり、81年の特定調査に比べて、83年のポカラ全戸調査ではカースト通婚者を見逃す調査意図の不徹底さから、多くのカースト通婚夫婦を見逃してしまったのではないかというのが、現在の我々の結論である。都市人類学を専攻する私としては、何万人もの人口を対象として何10人もの調査助手を駆使して実施する大型の社会調査では、その調査目的の鮮明さ、周到が、得られた結果の正確さに大きく影響する教訓を、この1981年と1983年の調査結果のカースト通婚のデータを比較することによって得ることが出来た。これは、手痛い、しかし貴重な教訓と言うべきであろう。

3. 4 結語にかえて

今年度の卒論では、ポカラ全戸調査のデータの最期の未集計部分であった「特記事項」の集計に挑戦して頂いた。この数年間で完成させたポカラ・センサス・データベースの総体から見れば、特記事項は残余部分であり、情報として貴重な物も、屑のような物もごしゃまぜで残されているところである。また、そのごしゃまぜされている状況の故にオリジナルなデータを集計する為の情報整理作業に時間が掛かるのみならず、集計自体にもデータの質の多様性・複雑さ故の困難さがあったものと思われる。その困難さにも関わらず、この様な形できちんと集計して下さった松熊康一郎、山下亜紀子両

君のご苦勞を多としたいし、心からの感謝を申し上げたい。

今年は時間的な制限から特記事項の「ジュマ」、「出稼ぎ」、「カースト通婚」の三つに焦点を当てて集計し分析していただいた。その分析の結果に対する私なりの所感は上記(1)から(3)に述べさせて頂いた次第である。それらを総括すると、特に(1)のジュマの成果は素晴らしい物がある。この報告書を読まれる読者も(1)の部分をもっと興味深く読まれるであろうと確信するし、それは、大型の社会的調査から得た「数量的分析」の大地に、私のポカラでのフィールドワークで得た「質的(意味的)分析」という種を蒔き水をやった年月が結実した一輪のバラの花のようなものなのである。社会科学の方法論的目標として、永年、質のデータと量のデータの統合が多く学者によって唱えられ、多くの実証的学者により挑戦されてきたが、それがうまい具合に絡み合い、相補的に互助しあって素晴らしい発見、成果が生まれた例は決して多くない。その意味から言えば、この成果は長年かけた北村ゼミの一つの到達点を象徴しているし、このジュマの分析は、特記の屑の山で見つけた一つの宝石と言えよう。私自身が漠然とし考えていたジュマの問題に綺麗な形で一つの解答を与えてくれたし、今後の調査の興味ある方向性を明瞭に示してくれており、教えられる所が実に多かった。

(2)の出稼ぎのデータも、オリジナルなデータそれ自身が完全なものではない。この成果に出稼ぎ者の出身家族の構成と経済階級情報、ならびに出稼ぎ先の特定情報(せめて国内か、国外なら国名)と、その出稼ぎ先での職種が明瞭ならば、もっと豊かな発見があるはずである。しかし、オリジナルなデータにないものを強いるのは酷であろう。いずれこの問題は、インド・ネパールの人口移動と国際関係の観点から新しい調査が実施されるべきであると考えている。更に、(3)のカースト通婚のデータに関してもオリジナルなデータの不備なところが調査結果の意味解釈に決定的な影響を与える一つの具体的例としては、将来のよい教材となろう。近い将来に私の務める政経学部にも大学院が出来る予定であるので、この分析結果は、私の81年の調査結果と参照しながら、大型調査の調査方法論の重要性を訴える教材として活用されるはずである。

最期に、私自身が勤務校において留学生別科長、国際交流委員長、そして国際交流センター長という三つの管理職をまとめて背負わされて「身体疲労」の極限にあり、気がかりになりながらも、北村ゼミネパール班の諸君に満足な指導が出来なかったことを誠に申し訳ないと思っている。あと一年でやっと現在の重責から解放される見込みが成立した現在、この1997年こそは夏のポカラ調査を挙行し、そして更に1998年には北村ゼミの学生諸君によって長年助けていただいたポカラ・センサス・データの総合分析を英語で出版する為の執筆を開始する予定である。

3. 5 参照文献

Yuji Yamamoto

1983 "Inter-Caste Marriages in Pokhara: Sanskritization or Urbanization?", pp. 1-38,

【アジア・アフリカ言語文化研究】25号

(山本勇次)

4 資料

表1 カースト毎の出稼ぎの割合（男性）

カースト	男性の出稼ぎ全数	男性の全数	割合
BRA	368	3780	9.74%
CHH	468	3317	14.11%
GUR	607	2864	21.19%
GIR	47	345	13.62%
THA	37	341	10.85%
MAG	75	751	9.99%
NEW	210	2455	8.55%
GHA	14	194	7.22%
TAM	5	119	4.20%
RAI	1	40	2.50%
LAM	2	92	2.17%
BHO	1	133	0.75%
LIM	0	1	0.00%
SHE	0	37	0.00%
TRU	0	8	0.00%
UNT	91	1700	5.35%
OTH	1	38	2.63%
XXX	0	9	0.00%
合計	1927	16224	11.88%

表2 カースト毎の出稼ぎの割合（女性）

カースト	女性の出稼ぎ全数	女性の全数	割合
BRA	123	3442	3.57%
CHH	122	3252	3.75%
GUR	118	2775	4.25%
GIR	13	366	3.55%
THA	14	329	4.26%
MAG	19	656	2.90%
NEW	98	2441	4.01%
GHA	5	209	2.39%
TAM	2	88	2.27%
RAI	0	25	0.00%
LAM	0	69	0.00%
BHO	1	96	1.04%
LIM	0	1	0.00%
SHE	0	21	0.00%
TRU	0	1	0.00%
UNT	41	1799	2.28%
OTH	0	32	0.00%
XXX	1	10	10.00%
合計	557	15612	3.57%

表3 カースト毎のジュマの割合

カースト	JUMMA合計	全数	割合
SHE	1	21	4.76%
NEW	65	2441	2.66%
BHO	2	96	2.08%
THA	7	329	2.13%
GIR	5	366	1.37%
TAM	1	88	1.14%
CHH	30	3252	0.92%
UNT	12	1799	0.67%
GUR	15	2775	0.54%
GHA	1	209	0.48%
MAG	3	656	0.46%
BRA	12	3442	0.35%
XXX	0	10	0.00%
TRU	0	1	0.00%
RAI	0	25	0.00%
OTH	0	32	0.00%
LIM	0	1	0.00%
LAM	0	69	0.00%
合計	154	15612	0.99%

表4 男女のカーストの組み合わせ表（カースト通婚：1981, Yamamoto）

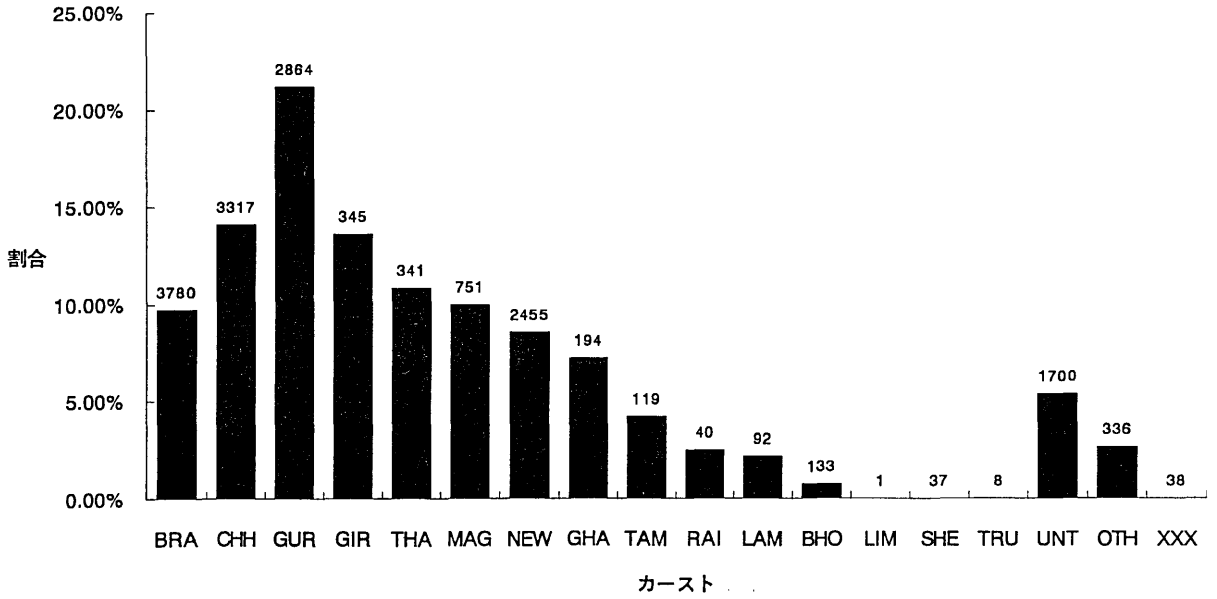
女性

カースト	BRA	CHH	GIR	GHA	NEW	GUR	THA	MAG	TAM	FOR	BHO	DAM	KAM&SUN	SAR	MUS	OTH
BRA		38	0	3	19	2	2	7	1	4	0	0	1	0	0	0
CHH	8		3	13	14	6	6	6	3	2	2	0	0	0	0	0
GIR	3	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
GHA	0	0	0		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
NEW	7	20	1	1		13	3	7	2	1	2	0	2	0	0	0
GUR	7	13	0	1	6		4	7	2	0	0	1	1	0	0	0
THA	1	0	0	0	3	1		2	0	0	0	0	0	0	0	0
MAG	6	10	0	0	4	11	1		1	0	0	0	0	0	0	0
TAM	0	1	0	0	0	0	0	0		0	0	0	1	0	0	0
FOR	2	1	0	0	3	1	0	0	0		0	0	0	0	0	0
BHO	1	0	1	0	0	4	0	0	0	0		1	0	0	0	1
DAM	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0		2	1	0	0
KAM&SUN	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0		2	0	0
SAR	1	0	0	4	0	3	0	0	0	3	0	0	0		0	0
MUS	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
OTH	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Male	77	63	3	1	59	42	7	33	2	7	8	5	3	11	4	4
Female	38	86	5	24	51	43	16	30	9	10	4	2	7	3	0	1
Male合計	329															
Female合計	329															

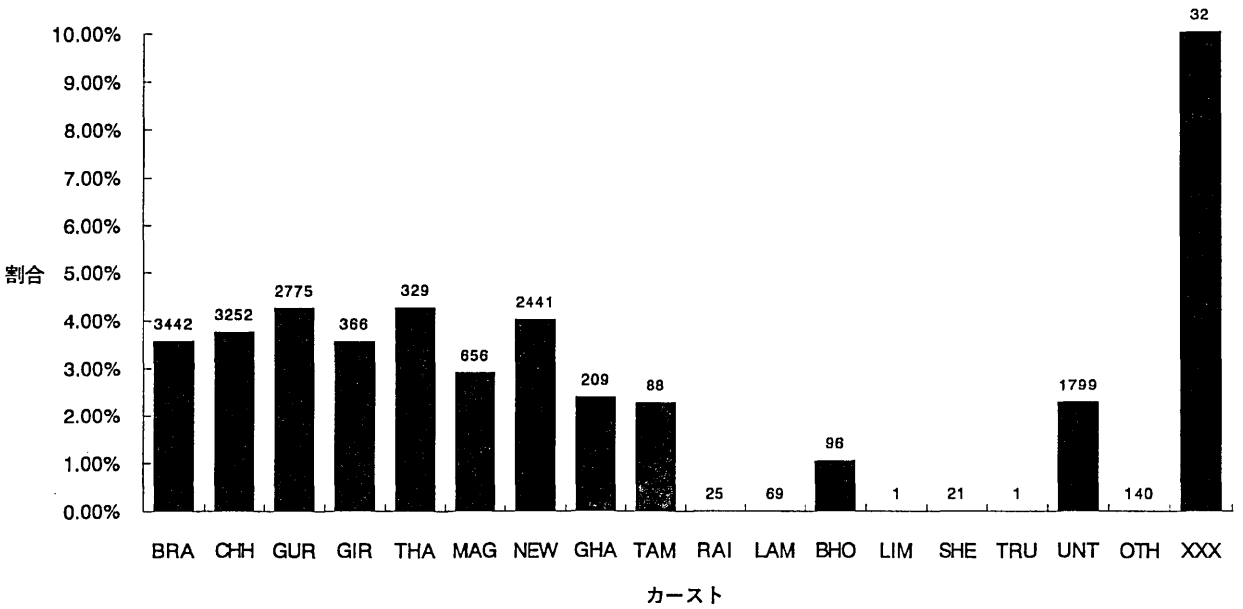
表5 男女のカーストの組み合わせ表（カースト通婚）

女性

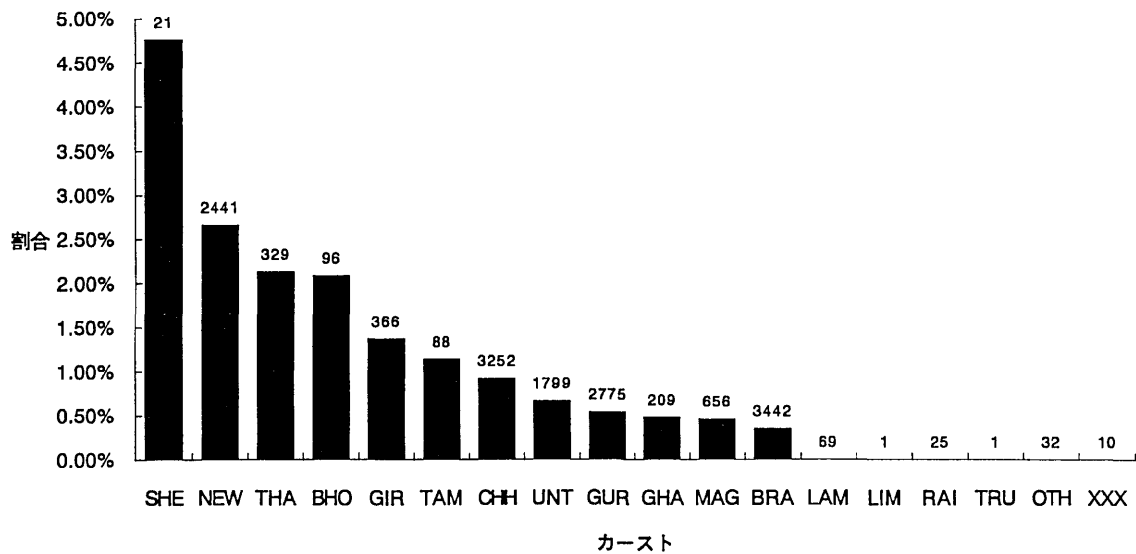
カースト	BRA	CHH	GIR	GHA	NEW	GUR	THA	MAG	TAM	FOR	BHO	DAM	KAM&SUN	SAR	MUS	OTH
BRA		25	2	2	14	3	5	3	0	4	0	1	0	1	0	0
CHH	10		5	6	15	10	9	9	1	4	0	0	0	0	0	1
GIR	2	3		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
GHA	1	2	0		0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
NEW	7	19	0	0		9	5	4	0	0	0	0	1	1	0	1
GUR	7	10	1	1	4		5	8	0	1	0	0	2	2	0	1
THA	2	0	0	0	4	1		2	0	0	0	0	0	0	0	0
MAG	4	5	0	1	3	14	0		3	0	0	0	0	0	0	0
TAM	0	1	0	0	0	1	0	0		0	0	0	0	0	0	1
FOR	0	4	0	0	2	1	0	0	0		0	0	1	1	0	0
BHO	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
DAM	0	1	0	0	0	0	0	1	1	3	0		0	0	0	0
KAM&SUN	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0		1	0	0
SAR	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0		0	0
MUS	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
OTH	0	1	0	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
Male	60	70	5	5	47	42	9	30	3	9	0	6	3	2	1	5
Female	33	73	8	10	44	42	24	29	5	13	0	1	5	6	0	4
Male合計	297															
Female合計	297															



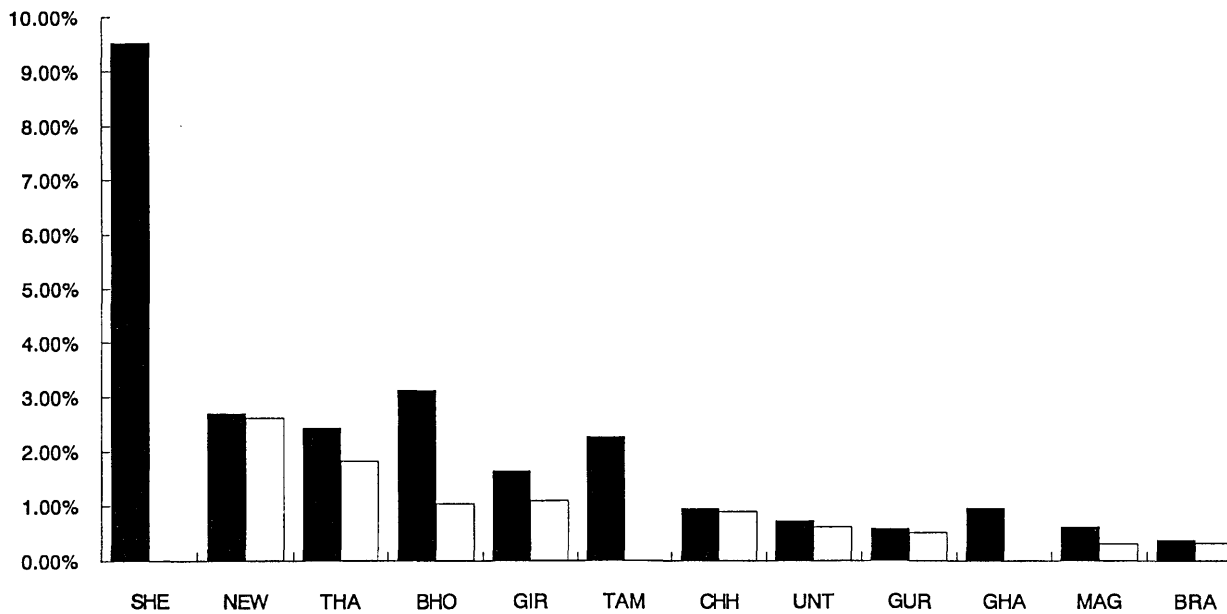
グラフ1 カースト毎の出稼ぎの割合（男性）



グラフ2 カースト毎の出稼ぎの割合（女性）



グラフ3 カースト毎のジュマの割合



グラフ4 カースト毎のジュマの割合 (±1の持つ重み)